

出題傾向と対策

OTEMON
GAKUIN
UNIVERSITY
2026

■ 出題傾向と対策

英 語	06
国 語	07
数 学	09
日 本 史	11
世 界 史	13
政治・経済	15
物 理	16
化 学	18
生 物	19

出題傾向と対策

英語

<全体分析>

	公募制推薦入試	一般入試
試験時間	60分	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	問題数：大問4、解答マーク数30。量は標準的な分量である。難易度は標準からやや難。	問題数：大問5、解答マーク数40。長文2題が出題され、量は多め。問題のレベルは標準からやや難。
大問の構成	〔Ⅰ〕長文読解 〔Ⅱ〕文法・語法の空所補充問題と間違い箇所の指摘問題 〔Ⅲ〕対話文完成 〔Ⅳ〕整序英作文	〔Ⅰ〕長文読解 〔Ⅱ〕長文問題 〔Ⅲ〕文法・語法の空所補充問題と間違い箇所の指摘問題 〔Ⅳ〕対話文完成 〔Ⅴ〕整序英作文

出題傾向・内容分析

●長文読解

〔公募制推薦入試〕

長文は600～750語程度の長さのものが出題されている。主題は時事的な内容を中心に様々な内容が取り上げられている。語注は付されていないため、見慣れない語句や表現は前後の内容から推測して読み進める必要がある。主に空所補充問題、特定の語句の意味や指示語などを問う問題が出題される。文全体の主旨を問う問題として、表題を選ぶ問題、内容一致の問題が出題される。

〔一般入試〕

長文読解問題が2題出題され、長さは〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕ともに600～1000語程度と少し幅があり、〔Ⅱ〕の長文は〔Ⅰ〕より若干短めのものが出題される。公募制推薦入試と同様、主題は時事的な内容を中心に様々な内容が取り上げられ、語注は付されていない。〔Ⅰ〕は公募制推薦入試と全く同じ形式の設問が出題され、〔Ⅱ〕は3箇所の空所に入る英文、または長めの語句を選ぶ問題、本文の内容について英語の質問に対する答えを選ぶ問題が2問、表題を選ぶ問題、内容一致の問題が出題される。

●文法・語法問題と間違い箇所の指摘

空所補充の文法・語法問題は4問で、正解として群前置詞句のような3～4語で構成された表現が入り、正解以外の選択肢はすべて語の並びが間違っているものになっており、通常の文法・語法問題とは異なり、特徴的な出題となっている。間違い箇所指摘の問題は3問、または4問で、それぞれの英文の4箇所に下線が引かれ、文法・語法の間違いがあるものを選択する形式になっている。

●対話文完成

4～5往復程度の対話文の5箇所の発言が空所になっていて、空所に入る適切な英文を5つの選択肢から選んで対話文全体を完成させる形式になっている。会話の流れは必ずしも単純ではなく、設定・文脈を正確に把握する必要がある。公募制推薦入試では1問、一般入試では2問出題されている。

●整序英作文

日本語の意味に合うように、語（句）を並べて英文を完成させる問題である。並べ替える空所は5箇所で、そのうちの1箇所に入るものの番号を答える。日本語は直訳ではなく自然な表現になっているため、英文として成り立つかどうかを確認する必要がある。公募制推薦入試では5問、一般入試では4問出題されている。

学習アドバイス

●長文読解

英文を読むのが苦手な人は、学校の授業で使用されている教材を復習することから始め、英語検定準2級レベルから2級レベルの読解演習問題へとステップアップしていくと良いでしょう。時事的な内容が取り上げられることが多いので、日ごろから様々な話題について見聞を広げておくことが大切です。頻繁に話題になることについて書かれた英文記事を、ネットなどを利用して読んでみましょう。文章の主題と、その主題がどのように展開されているかに注意を払いながら、文脈や前後関係で内容を理解する練習をしましょう。意味が捉えにくい箇所は、一通り読み終えた後に辞書を用いながら確認・精読をして、文法・構文の確認と語彙を身に付けることも重要です。

●文法・語法に関する空所補充問題と間違い箇所の指摘

入試基礎～標準レベルの問題集に取り組んで基本的な文法・語法の知識を身に付けると同時に、標準レベルの単語集や熟語集に記載された例文を音読しましょう。群動詞句や群前置詞句を含む例文をくり返したくさん読み、長文も音読すると、正しい英文が記憶に残りやすくなります。

●対話文完成

様々な会話を聞いたり、テキスト化されたものを読んだりして、対話に慣れることが大切です。対話文を読むときは、一人の発言に対して相手がどのように返答するか常に想像しながら読み進める練習をしましょう。

●整序英作文

日本語の語順にとらわれずに、英語表現のルールに則って並び替える必要があります。無生物主語や、動詞の部分が名詞中心の表現に置き換えられることなどに注意しましょう。基本的な文法や構文の知識を身に付けて、問題集や過去問などで演習しましょう。

出題傾向と対策

国語

<全体分析>

	公募制推薦入試	一般入試
試験時間	60分	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	設問数は19～21で、標準レベル	設問数は23～28で、標準レベル
大問の構成	大問1題または大問2題（同一出典からの出題）	大問2題または3題（同一出典からの出題）

出題傾向・内容分析

●入試問題の概要

現代文のみの出題で、公募制推薦入試は大問1題または2題、一般入試は大問2題または3題である。ただし2題、3題と言っても同一出典からの出題で、甲・乙または甲・乙・丙に分けてそれぞれに設問を配しており、実質的には1題とみなすこともできる。本学特有の出題形式であるので、過去問で十分に練習して慣れしておく必要がある。設問はすべて客観式（マークシート方式）である。漢字の書き取り、読み、部首、語句の意味、口語文法、空所補充、欠文挿入、文整序、内容説明、理由説明、内容合致などの一般的な形式の設問が満遍なく出題されている。難易度は標準レベルと言えるが、文章量・設問数ともにボリュームがあるので、時間配分への配慮が必要である。

●出題文章の傾向

受験生にとって取り組みやすく、具体的で親しみやすい文章が選ばれている。抽象概念が多用されるような硬質の評論文からの出題はない。総じて標準的な文章と言えるが、特に一般入試は文章量にボリュームがある。社会・経済・歴史・文学・芸術・文化人類学・自然科学系統の評論が中心で、ときに随筆的な性格を持つ文章も出題される。また、翻訳文の出題もあるので留意しておきたいが、特別な対策が必要というわけではない。

2026年度入試内容を概観しておこう。公募制推薦入試は、佐倉統の『科学とは何か 新しい科学論、いま必要な三つの視点』・小堀鷗一郎の『死を生きる 訪問診療医がみた709人の生老病死』・立川昭二の『病気の社会史』、一般入試は、廣野由美子の『シンデレラはどこへ行ったのか』・少女小説と『ジェイン・エア』・今井むつみの『学力喪失—認知科学による回復への道筋』・松永伸司の「まじめな遊び、ふざけた遊び」・イェンヌ・ダムベリの『脂肪と人類』・溝井裕一の『動物園の文化史 ひとと動物の5000年』・山極壽一の『共感革命 社交する人類の進化と未来』が出題された。以上のように様々な分野から出題されており、出典内容に偏りはない。どのような話題に対しても柔軟に対応できる読解力を受験生に求めている。

●設問の傾向

選択肢は5択（選択肢5→正解1）が基本で、内容合致・不一致判定設問などは7択（7→1）、8択（8→1）となる場合が多い。共通テストが4択、他の大学は5択が中心なので、判定に時間がかかるように思うかもしれないが、選択に迷うような曖昧な選択肢はまれであり、はっきりと正解が決まるものがほとんどである。

以下、主な設問形式について触れておこう。

漢字の書き取りは傍線部のカタカナに当たる漢字を選択させるもの、読みは漢字の最初の音や訓読みを選択させるものが中心となる。いずれも高校教育レベルの範囲内に収まる基本的な常用漢字が問われている。

空所補充は、キーワード、抽象概念語、カタカナ語、接続詞・副詞、慣用句の一部などが中心となる。連文節や一文の補充もある。どちらにしても単語力と、前後の文脈の理解が求められる。

語意問題は今日一般に使用されている語彙力を試すもので、抽象語、カタカナ語、ことわざ、慣用句、など幅広く出題されるが、あくまで基本的、標準的なレベルである。正解の選択肢は辞書に載っている意味をそのまま、あるいは多少の修正を加えたものがほとんどなので、日頃から国語辞典を引く習慣を身につけたい。

文整序は、前後の文脈を把握した上で、整序すべき文同士のつながりを的確に理解できているかが問われている。選択肢があるので、冷静に吟味していけば、特に難解なものではない。

内容説明・理由説明は、傍線部に関わる文脈が把握できているか否かを問うものであるが、基本的な文章読解力があれば十分対応可能である。選択肢は比較的短く、過度に長いものはない。正解の選択肢は本文の語句そのまま利用したものが中心であるが、その一部を同意表現に言い換えるなど、工夫を凝らしたものも少なからずある。不正解の選択肢については、本文の内容から全くずれたものの判定は容易だが、本文の語句をうまく利用しつつも不適切となるように細工されたものには注意を要する。いわゆる「ひっかけ」の選択肢である。傍線部自身、傍線部に関わるキーワードの使い方や、傍線部を含む文脈の論理的な展開を的確に把握することが重要である。

内容合致・不一致判定問題は各大問の最後に置かれている。甲・乙または甲・乙・丙に分かれている場合は、甲で問われ、乙で問われ、丙で問われ、最後にまとめて問われることが多い。選択肢の適否を対応箇所と丁寧に照合しながら吟味する作業が必要なので、他の設問よりも時間がかかる。合致問題では大部分は明らかに不一致であったり、不一致問題では明らかに合致していたりするのだが、やはり「ひっかけ」の選択肢が存在するので、明らかに判定できるものを消去して残った選択肢を慎重に吟味したい。

学習アドバイス

●読解力の養成

現代文の実力は短期間に身につくものではない。着実に一步一步進む姿勢で臨みたい。短時間のうちに文章の内容を的確に把握することが目標であるが、まずはあわてずに精読を心がけよう。時間を気にせずじっくりと文章を読みながら、自分の理解しがたいことが何であるかを自覚する必要がある。それが単に語彙のレベルなら、国語辞典を引くなどして、語彙力を付ければよい。未知の話題についていけないということなら、新書などの入門書を活用して、幅広い分野の知識を付けることも必要であるが、文書の論理展開を読み解きながら、文章と格闘する力を付けていくことも重要である。その際には、問題集を積極的に活用すればよい。

国語

●辞書・キーワード集の活用

豊富な語彙力が文章読解の基礎にある。言葉を知らずに文意の理解や要旨の把握ができるはずはない。評論文で用いられる言葉の中心は、日常会話やメール・ラインで使用する言葉ではなく、抽象的で、概念的な漢語やカタカナ語で、このような言葉は、自然と身につくものではなく、意識して努力しなければ習得することができない。意味の分からない言葉に出会ったら、調べることである。電子辞書でもよいし、インターネットで検索してもよい。知らないままほったらかしにしておいてはいけない。また、評論文キーワード集も数多く出版されているので、こうしたものも積極的に活用したい。これらは評論文を読むための重要語を効率よく理解、習得できるように工夫されている。評論用語と日常生活で使用する言葉の間には膨大な言葉があるが、それらを習得するには、漢字の問題集が役に立つ。ただし、言葉の意味はただ暗記しているだけではなく、それらの言葉が文章の中で、どのような文脈で用いられているかを理解することも重要である。

●読書習慣と普段の学習

入試現代文では、大学での学習、研究に必要な文章読解力が身につけているかが試される。そうした読解力を習得するために最も有効的な方法は、本を読む習慣をつけることである。まず読解力を獲得してから本を読むのではない。読解力は本を読み続けているうちに自ずと習得できるものである。しかし、新書や文庫本でさえ分厚そうに感じて、手に取るのもおっくうな受験生も多いだろう。そうした受験生の読書の入り口が高校の現代文の教科書である。そこに収録されている様々な内容、様々な文体の日本語の文章は厳選された良質のものである。高校三年間で使用する現代文の教科書に収録されている文章のすべてが授業で扱われるわけではない。授業で扱われなかったものも含めて、すべてをもう一度通読、精読してみるとよい。興味を感じる文章がきっと見つかるはずである。それが読書の範囲を広げていくきっかけとなるに違いない。

●過去問を解く

出題傾向・内容分析で見たように、出典は多岐にわたり、文章も決して短くはない。限られた時間内で内容を的確に把握し、かなりの量の設問を適切に対応するためには、過去問を使った実践的な演習は欠かせない。60分という目安を立てて、時間内に全問解くだけの実力を身につけよう。さらに、標準レベルで選択式の問題集も利用して、多様な分野の文章を読み、多様な設問形式に挑戦しておけば、入試本番で戸惑うこともないだろう。

出題傾向と対策

OTEMON
GAKUIN
UNIVERSITY
2026

■ 出題傾向と対策

英 語	06
国 語	07
数 学	09
日 本 史	11
世 界 史	13
政治・経済	15
物 理	16
化 学	18
生 物	19

出題傾向と対策

英語

<全体分析>

	公募制推薦入試	一般入試
試験時間	60分	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	問題数：大問4、解答マーク数30。量は標準的な分量である。難易度は標準からやや難。	問題数：大問5、解答マーク数40。長文2題が出題され、量は多め。問題のレベルは標準からやや難。
大問の構成	〔Ⅰ〕長文読解 〔Ⅱ〕文法・語法の空所補充問題と間違い箇所の指摘問題 〔Ⅲ〕対話文完成 〔Ⅳ〕整序英作文	〔Ⅰ〕長文読解 〔Ⅱ〕長文問題 〔Ⅲ〕文法・語法の空所補充問題と間違い箇所の指摘問題 〔Ⅳ〕対話文完成 〔Ⅴ〕整序英作文

出題傾向・内容分析

●長文読解

〔公募制推薦入試〕

長文は600～750語程度の長さのものが出題されている。主題は時事的な内容を中心に様々な内容が取り上げられている。語注は付されていないため、見慣れない語句や表現は前後の内容から推測して読み進める必要がある。主に空所補充問題、特定の語句の意味や指示語などを問う問題が出題される。文全体の主旨を問う問題として、表題を選ぶ問題、内容一致の問題が出題される。

〔一般入試〕

長文読解問題が2題出題され、長さは〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕ともに600～1000語程度と少し幅があり、〔Ⅱ〕の長文は〔Ⅰ〕より若干短めのものが出題される。公募制推薦入試と同様、主題は時事的な内容を中心に様々な内容が取り上げられ、語注は付されていない。〔Ⅰ〕は公募制推薦入試と全く同じ形式の設問が出題され、〔Ⅱ〕は3箇所の空所に入る英文、または長めの語句を選ぶ問題、本文の内容について英語の質問に対する答えを選ぶ問題が2問、表題を選ぶ問題、内容一致の問題が出題される。

●文法・語法問題と間違い箇所の指摘

空所補充の文法・語法問題は4問で、正解として群前置詞句のような3～4語で構成された表現が入り、正解以外の選択肢はすべて語の並びが間違っているものになっており、通常の文法・語法問題とは異なり、特徴的な出題となっている。間違い箇所指摘の問題は3問、または4問で、それぞれの英文の4箇所に下線が引かれ、文法・語法の間違いがあるものを選択する形式になっている。

●対話文完成

4～5往復程度の対話文の5箇所の発言が空所になっていて、空所に入る適切な英文を5つの選択肢から選んで対話文全体を完成させる形式になっている。会話の流れは必ずしも単純ではなく、設定・文脈を正確に把握する必要がある。公募制推薦入試では1問、一般入試では2問出題されている。

●整序英作文

日本語の意味に合うように、語（句）を並べて英文を完成させる問題である。並べ替える空所は5箇所で、そのうちの1箇所に入るものの番号を答える。日本語は直訳ではなく自然な表現になっているため、英文として成り立つかどうかを確認する必要がある。公募制推薦入試では5問、一般入試では4問出題されている。

学習アドバイス

●長文読解

英文を読むのが苦手な人は、学校の授業で使用されている教材を復習することから始め、英語検定準2級レベルから2級レベルの読解演習問題へとステップアップしていくと良いでしょう。時事的な内容が取り上げられることが多いので、日ごろから様々な話題について見聞を広げておくことが大切です。頻繁に話題になることについて書かれた英文記事を、ネットなどを利用して読んでみましょう。文章の主題と、その主題がどのように展開されているかに注意を払いながら、文脈や前後関係で内容を理解する練習をしましょう。意味が捉えにくい箇所は、一通り読み終えた後に辞書を用いながら確認・精読をして、文法・構文の確認と語彙を身に着けることも重要です。

●文法・語法に関する空所補充問題と間違い箇所の指摘

入試基礎～標準レベルの問題集に取り組んで基本的な文法・語法の知識を身に付けると同時に、標準レベルの単語集や熟語集に記載された例文を音読しましょう。群動詞句や群前置詞句を含む例文をくり返したくさん読み、長文も音読すると、正しい英文が記憶に残りやすくなります。

●対話文完成

様々な会話を聞いたり、テキスト化されたものを読んだりして、対話に慣れることが大切です。対話文を読むときは、一人の発言に対して相手がどのように返答するか常に想像しながら読み進める練習をしましょう。

●整序英作文

日本語の語順にとらわれずに、英語表現のルールに則って並び替える必要があります。無生物主語や、動詞の部分が名詞中心の表現に置き換えられることなどに注意しましょう。基本的な文法や構文の知識を身に着けて、問題集や過去問などで演習しましょう。

<全体分析>

	公募制推薦入試	一般入試
試験時間	60分	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	設問数は19～21で、標準レベル	設問数は23～28で、標準レベル
大問の構成	大問1題または大問2題（同一出典からの出題）	大問2題または3題（同一出典からの出題）

出題傾向・内容分析

●入試問題の概要

現代文のみの出題で、公募制推薦入試は大問1題または2題、一般入試は大問2題または3題である。ただし2題、3題と言っても同一出典からの出題で、甲・乙または甲・乙・丙に分けてそれぞれに設問を配しており、実質的には1題とみなすこともできる。本学特有の出題形式であるので、過去問で十分に練習して慣れしておく必要がある。設問はすべて客観式（マークシート方式）である。漢字の書き取り、読み、部首、語句の意味、口語文法、空所補充、欠文挿入、文整序、内容説明、理由説明、内容合致などの一般的な形式の設問が満遍なく出題されている。難易度は標準レベルと言えるが、文章量・設問数ともにボリュームがあるので、時間配分への配慮が必要である。

●出題文章の傾向

受験生にとって取り組みやすく、具体的で親しみやすい文章が選ばれている。抽象概念が多用されるような硬質の評論文からの出題はない。総じて標準的な文章と言えるが、特に一般入試は文章量にボリュームがある。社会・経済・歴史・文学・芸術・文化人類学・自然科学系統の評論が中心で、ときに随筆的な性格を持つ文章も出題される。また、翻訳文の出題もあるので留意しておきたいが、特別な対策が必要というわけではない。

2026年度入試内容を概観しておこう。公募制推薦入試は、佐倉統の『科学とは何か 新しい科学論、いま必要な三つの視点』・小堀鷗一郎の『死を生きる 訪問診療医がみた709人の生老病死』・立川昭二の『病気の社会史』、一般入試は、廣野由美子の『シンデレラはどこへ行ったのか』・少女小説と『ジェイン・エア』・今井むつみの『学力喪失—認知科学による回復への道筋』・松永伸司の「まじめな遊び、ふざけた遊び」・イェンヌ・ダムベリの『脂肪と人類』・溝井裕一の『動物園の文化史 ひとと動物の5000年』・山極壽一の『共感革命 社交する人類の進化と未来』が出題された。以上のように様々な分野から出題されており、出典内容に偏りはない。どのような話題に対しても柔軟に対応できる読解力を受験生に求めている。

●設問の傾向

選択肢は5択（選択肢5→正解1）が基本で、内容合致・不一致判定設問などは7択（7→1）、8択（8→1）となる場合が多い。共通テストが4択、他の大学は5択が中心なので、判定に時間がかかるように思うかもしれないが、選択に迷うような曖昧な選択肢はまれであり、はっきりと正解が決まるものがほとんどである。

以下、主な設問形式について触れておこう。

漢字の書き取りは傍線部のカタカナに当たる漢字を選択させるもの、読みは漢字の最初の音や訓読みを選択させるものが中心となる。いずれも高校教育レベルの範囲内に収まる基本的な常用漢字が問われている。

空所補充は、キーワード、抽象概念語、カタカナ語、接続詞・副詞、慣用句の一部などが中心となる。連文節や一文の補充もある。どちらにしても単語力と、前後の文脈の理解が求められる。

語意問題は今日一般に使用されている語彙力を試すもので、抽象語、カタカナ語、ことわざ、慣用句、など幅広く出題されるが、あくまで基本的、標準的なレベルである。正解の選択肢は辞書に載っている意味をそのまま、あるいは多少の修正を加えたものがほとんどなので、日頃から国語辞典を引く習慣を身につけたい。

文整序は、前後の文脈を把握した上で、整序すべき文同士のつながりを的確に理解できているかが問われている。選択肢があるので、冷静に吟味していけば、特に難解なものではない。

内容説明・理由説明は、傍線部に関わる文脈が把握できているか否かを問うものであるが、基本的な文章読解力があれば十分対応可能である。選択肢は比較的短く、過度に長いものはない。正解の選択肢は本文の語句そのまま利用したものが中心であるが、その一部を同意表現に言い換えるなど、工夫を凝らしたものが少なからずある。不正解の選択肢については、本文の内容から全くずれたものの判定は容易だが、本文の語句をうまく利用しつつも不適切となるように細工されたものには注意を要する。いわゆる「ひっかけ」の選択肢である。傍線部自身、傍線部に関わるキーワードの使い方や、傍線部を含む文脈の論理的な展開を的確に把握することが重要である。

内容合致・不一致判定問題は各大問の最後に置かれている。甲・乙または甲・乙・丙に分かれている場合は、甲で問われ、乙で問われ、丙で問われ、最後にまとめて問われることが多い。選択肢の適否を対応箇所と丁寧に照合しながら吟味する作業が必要なので、他の設問よりも時間がかかる。合致問題では大部分は明らかに不一致であったり、不一致問題では明らかに合致していたりするのだが、やはり「ひっかけ」の選択肢が存在するので、明らかに判定できるものを消去して残った選択肢を慎重に吟味したい。

学習アドバイス

●読解力の養成

現代文の実力は短期間に身につくものではない。着実に一步一步進む姿勢で臨みたい。短時間のうちに文章の内容を的確に把握することが目標であるが、まずはあわてずに精読を心がけよう。時間を気にせずじっくりと文章を読みながら、自分の理解しがたいことが何であるかを自覚する必要がある。それが単に語彙のレベルなら、国語辞典を引くなどして、語彙力を付ければよい。未知の話題についていけないということなら、新書などの入門書を活用して、幅広い分野の知識を付けることも必要であるが、文書の論理展開を読み解きながら、文章と格闘する力を付けていくことも重要である。その際には、問題集を積極的に活用すればよい。

国語

●辞書・キーワード集の活用

豊富な語彙力が文章読解の基礎にある。言葉を知らずに文意の理解や要旨の把握ができるはずはない。評論文で用いられる言葉の中心は、日常会話やメール・ラインで使用する言葉ではなく、抽象的で、概念的な漢語やカタカナ語で、このような言葉は、自然と身につくものではなく、意識して努力しなければ習得することができない。意味の分からない言葉に出会ったら、調べることである。電子辞書でもよいし、インターネットで検索してもよい。知らないままほったらかしにしておいてはいけない。また、評論文キーワード集も数多く出版されているので、こうしたものも積極的に活用したい。これらは評論文を読むための重要語を効率よく理解、習得できるように工夫されている。評論用語と日常生活で使用する言葉の間には膨大な言葉があるが、それらを習得するには、漢字の問題集が役に立つ。ただし、言葉の意味はただ暗記しているだけではなく、それらの言葉が文章の中で、どのような文脈で用いられているかを理解することも重要である。

●読書習慣と普段の学習

入試現代文では、大学での学習、研究に必要な文章読解力が身につけているかが試される。そうした読解力を習得するために最も有効的な方法は、本を読む習慣をつけることである。まず読解力を獲得してから本を読むのではない。読解力は本を読み続けているうちに自ずと習得できるものである。しかし、新書や文庫本でさえ分厚そうに感じて、手に取るのもおっくうな受験生も多いだろう。そうした受験生の読書の入り口が高校の現代文の教科書である。そこに収録されている様々な内容、様々な文体の日本語の文章は厳選された良質のものである。高校三年間で使用する現代文の教科書に収録されている文章のすべてが授業で扱われるわけではない。授業で扱われなかったものも含めて、すべてをもう一度通読、精読してみるとよい。興味を感じる文章がきっと見つかるはずである。それが読書の範囲を広げていくきっかけとなるに違いない。

●過去問を解く

出題傾向・内容分析で見たように、出典は多岐にわたり、文章も決して短くはない。限られた時間内で内容を的確に把握し、かなりの量の設問を適切に対応するためには、過去問を使った実践的な演習は欠かせない。60分という目安を立てて、時間内に全問解くだけの実力を身につけよう。さらに、標準レベルで選択式の問題集も利用して、多様な分野の文章を読み、多様な設問形式に挑戦しておけば、入試本番で戸惑うこともないだろう。

出題傾向と対策

数 学

<全体分析>

	公募制推薦入試・一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：適当 難易度：基礎から標準
大問の構成	公募制推薦入試（前期・後期） 〔1〕 場合の数と確率 〔2〕 数学Ⅰからの小問集合 〔3〕 図形と計量・図形の性質 〔4〕 数学Ⅱ 〔5〕 数学B（数列）または数学C（ベクトル） 〔6〕 数学Ⅲ（積分法を除く）からの小問集合 上記6題のうち3題を解答する。 一般入試（前期・後期） 〔1〕 数学Ⅰ・数学Aからの小問集合 〔2〕 場合の数と確率 〔3〕 数学Ⅱ・数学B（数列）・数学C（ベクトル）からの小問集合 〔4〕 数学Ⅱまたは数学B（数列） 〔5〕 数学Ⅲ・数学C（平面上の曲線と複素数平面）からの小問集合 上記5題のうち4題を解答する。

出題傾向・内容分析

公募制推薦入試（前期・後期）

●出題範囲

理工学部以外：以下の①②から選択

- ①数学Ⅰ、数学A
- ②数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A

理工学部：以下の③④から選択

- ③数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A、数学B（数列）、数学C（ベクトル）
- ④数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲ（積分法を除く）、数学A、数学B（数列）、数学C（ベクトル）

●出題傾向

小問集合では、基礎学力および典型問題の解法が身につけているかを問う問題が中心。大問では1つのテーマについて誘導形式で出題され、日程によっては入試標準レベルの思考力を要する問題も見られる。

●出題内容

数学Ⅰ

絶対値と不等式、集合（共通部分、和集合、補集合）、命題（必要十分条件）、2次関数（決定、最大値・最小値）、2次方程式と判別式、2次不等式、図形と計量（正弦定理、余弦定理、三角形の面積、内接円の半径、空間図形への応用）、データの分析（平均値、分散、相関係数）

数学A

確率（和事象、積事象、余事象、反復試行、確率の最大値、条件付き確率）、期待値、図形の性質（角の二等分線の性質、接線の長さ）

数学Ⅱ

複素数と方程式、対数関数（対数不等式）、三角関数（合成、最大値・最小値）、微分法（導関数、接線、極値、3次方程式の実数解の個数）、積分法（定積分で表された関数、2曲線で囲まれた図形の面積）

数学B

数列（等差数列、等比数列、数列の和、隣接3項間の漸化式）

数学C

ベクトル（平行条件、共面条件、内積となす角）

数学Ⅲ

極限（無限等比級数、関数の極限）、微分法（導関数、接線、極値、変曲点、方程式への応用）

一般入試（前期・後期）

●出題範囲

理工学部以外：数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A、数学B（数列）、数学C（ベクトル）

理工学部：以下の①②から選択

- ①数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A、数学B（数列）、数学C（ベクトル）
- ②数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲ、数学A、数学B（数列）、数学C（ベクトル、平面上の曲線と複素数平面）

●出題傾向

小問集合では、教科書の章末問題レベルの基礎・基本を問う問題が出題される。大問では、誘導に従いながら段階的に解き進める形式で、応用力や論理的な思考力が試される。

出題傾向と対策

数 学

<全体分析>

	公募制推薦入試・一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：適当 難易度：基礎から標準
大問の構成	公募制推薦入試（前期・後期） 〔1〕 場合の数と確率 〔2〕 数学Ⅰからの小問集合 〔3〕 図形と計量・図形の性質 〔4〕 数学Ⅱ 〔5〕 数学B（数列）または数学C（ベクトル） 〔6〕 数学Ⅲ（積分法を除く）からの小問集合 上記6題のうち3題を解答する。 一般入試（前期・後期） 〔1〕 数学Ⅰ・数学Aからの小問集合 〔2〕 場合の数と確率 〔3〕 数学Ⅱ・数学B（数列）・数学C（ベクトル）からの小問集合 〔4〕 数学Ⅱまたは数学B（数列） 〔5〕 数学Ⅲ・数学C（平面上の曲線と複素数平面）からの小問集合 上記5題のうち4題を解答する。

出題傾向・内容分析

公募制推薦入試（前期・後期）

●出題範囲

理工学部以外：以下の①②から選択

- ①数学Ⅰ、数学A
- ②数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A

理工学部：以下の③④から選択

- ③数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A、数学B（数列）、数学C（ベクトル）
- ④数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲ（積分法を除く）、数学A、数学B（数列）、数学C（ベクトル）

●出題傾向

小問集合では、基礎学力および典型問題の解法が身につけているかを問う問題が中心。大問では1つのテーマについて誘導形式で出題され、日程によっては入試標準レベルの思考力を要する問題も見られる。

●出題内容

数学Ⅰ

絶対値と不等式、集合（共通部分、和集合、補集合）、命題（必要十分条件）、2次関数（決定、最大値・最小値）、2次方程式と判別式、2次不等式、図形と計量（正弦定理、余弦定理、三角形の面積、内接円の半径、空間図形への応用）、データの分析（平均値、分散、相関係数）

数学A

確率（和事象、積事象、余事象、反復試行、確率の最大値、条件付き確率）、期待値、図形の性質（角の二等分線の性質、接線の長さ）

数学Ⅱ

複素数と方程式、対数関数（対数不等式）、三角関数（合成、最大値・最小値）、微分法（導関数、接線、極値、3次方程式の実数解の個数）、積分法（定積分で表された関数、2曲線で囲まれた図形の面積）

数学B

数列（等差数列、等比数列、数列の和、隣接3項間の漸化式）

数学C

ベクトル（平行条件、共面条件、内積となす角）

数学Ⅲ

極限（無限等比級数、関数の極限）、微分法（導関数、接線、極値、変曲点、方程式への応用）

一般入試（前期・後期）

●出題範囲

理工学部以外：数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A、数学B（数列）、数学C（ベクトル）

理工学部：以下の①②から選択

- ①数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A、数学B（数列）、数学C（ベクトル）
- ②数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲ、数学A、数学B（数列）、数学C（ベクトル、平面上の曲線と複素数平面）

●出題傾向

小問集合では、教科書の章末問題レベルの基礎・基本を問う問題が出題される。大問では、誘導に従いながら段階的に解き進める形式で、応用力や論理的な思考力が試される。

出題傾向と対策

数 学

●出題内容

数学 I

式の値、絶対値と不等式、集合（共通部分、和集合）、2 次関数（最大値・最小値、決定、グラフが x 軸から切り取る線分）、2 次方程式と判別式、2 次不等式、図形と計量（正弦定理、余弦定理、三角形の面積）、データの分析（平均値、分散）

数学 A

集合の要素の個数、確率（和事象・積事象・余事象、反復試行、条件付き確率）、期待値

数学 II

図形と方程式（円の方程式、接線）、三角関数（方程式、合成）、指数関数・対数関数（方程式・不等式）、微分法（極値、3 次方程式の解の個数）、積分法（定積分で表された関数、面積）

数学 B

数列（等差数列・等比数列、数列の和、階差数列、漸化式）

数学 C

ベクトル（内積となす角）

数学 III

極限（関数の極限）、微分法（最大値・最小値、媒介変数表示の導関数、接線）、積分法（区分求積法、計算、定積分で表された関数）、複素数平面（ド・モアブルの定理、複素数と図形）、平面上の曲線（極方程式、楕円、双曲線）

学習アドバイス

公募制推薦・一般入試のいずれも、「広範な分野から基礎力を問う小問集合」と「特定分野を深掘りする誘導形式の大問」という構成になっている。

全体として網羅的な出題がなされるため、苦手分野を作らないことが最大の対策になる。教科書の例題を完璧に理解した上で、章末問題や標準レベルの問題集を活用し、典型的な解法パターンを定着させよう。

●定理・公式の「本質」を理解する

公式を単なる「暗記の道具」として扱うのではなく、なぜその式が成り立つのか、導出過程を含めて理解しよう。数学的な背景を理解することで、少しひねられた問題でも「どの道具を使うべきか」を正しく判断できるようになる。

●問題を解くという経験を積む

実際に手を動かして問題を解く経験が、思考力と応用力を磨くことになる。特に確率や図形問題では、数式処理以前に「状況をどう整理するか」という判断が重要になる。教科書レベルをクリアしたら、入試標準レベルの問題集で「初見の問題に立ち向かう訓練」を積んでいこう。

●過去問演習と時間配分の意識

準備が整ってきたら、実際の試験時間に合わせて過去問を解いてみよう。自分の現時点での到達度を知るだけでなく、時間内に解き切るための優先順位の付け方を学ぶことが、合格への近道となる。

出題傾向と対策

日本史

<全体分析>

	一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：大問3問 小問（解答数）はいずれも合計40問 難易度：標準～やや易
大問の構成	一般入試前期日程（1月26日）：大問3問でリード文は計10及び史料文2 ・空欄の補充及び下線部に関する語句の選択問題が中心 ・日本地図（都道府県の区分あり）を用いた設問は6問、ほか美術作品等5点に関する出題は2問 ・史料はA・Bの2種類、語句の空欄補充、史料に関連する出来事や人物などを選択 ・正文・誤文を選択する出題は8問（1問は正文の組み合わせ） 一般入試前期日程（1月27日）：大問3問でリード文は計16及び史料文2 ・空欄の補充及び下線部に関する語句の選択問題が中心 ・複数の空欄に該当する正しい語句の組み合わせを選ぶ問題は2問 ・日本地図（都道府県の区分あり）を用いた設問は4問、ほか美術作品等1点に関する出題は1問 ・史料はA・Bの2種類、語句の空欄補充、史料に関連する出来事や人物などを選択 ・正文・誤文を選択する出題は10問 一般入試前期日程（2月5日）：大問3問でリード文は計9及び史料文2 ・空欄の補充及び下線部に関する語句の選択問題が中心 ・複数の空欄に該当する正しい語句の組み合わせを選ぶ問題は3問 ・日本地図（都道府県の区分あり）を用いた設問は2問、ほか写真等1点に関する出題は1問 ・史料はA・Bの2種類、語句の空欄補充、史料に関連する出来事や人物などを選択 ・正文・誤文を選択する出題は10問

出題傾向・内容分析

●出題傾向

解答方式は、全てマークシート方式で、語句の記述や論述の問題はない。

大問の構成は3問。それぞれにはリード文と史料文がつく。出題形式は、リード文中の空欄補充と下線部に関する語句選択が多いが、下線部に関する正文・誤文を選択する出題や、適切な語句の正しい組み合わせを選ぶ複合解答問題も出題される。

解答数は各日程ともに40で、時間的には60分で十分に余裕があるだろう。難易度は、教科書に記載されている基本語句（太字部分）を中心とした出題となっており、全体として「標準よりやや易」である。

●出題内容

2026年度は、原始から現代まで出題された（1月26日は1980年代、1月27日は2010年代、2月5日は1990年代）。

分野では、日程により多少の差異はあるものの、政治史を中心に、外交・文化・社会経済の分野から概ねバランス良く出題されている。

史料問題は、3日程とも〔Ⅱ〕で必ず出題されている。史料文は教科書や副教材である史料集に掲載されているものだけでなく、受験生には初見となる史料文もある。ただし、設問文には史料文を読み解くヒントが示されているため、解答に窮することはほとんどない。

1月26日、1月27日、2月5日のすべての日程の〔Ⅰ〕で、都道府県の境界を示した全国地図を用いた問題が出題され、この傾向は例年通りである。また、年度により異なるが美術品等の写真を用いた出題もみられる。

●出題の特徴

本学入試の特徴は、独立した数行のリード文が数多く出され、テーマも多様なことである。2020年度以降からすべての日程で大問が3問となり、全国地図を用いて歴史項目の場所を問う問題は必出となり、2026年度入試においても継続している。

1月26日実施分〔Ⅰ〕はリード文6、〔Ⅱ〕は史料文（A-1『百鍊抄』、A-2『愚管抄』、B総理『マッカーサー』会談要旨）、〔Ⅲ〕はリード文4で構成されている。史料問題はA、Bそれぞれの史料につき3問ずつの配分である。正文（誤文）を1つ選択する文選択問題は8題出題されている。

1月27日実施分〔Ⅰ〕はリード文12、〔Ⅱ〕では史料文（A『建武年間記録』、B『日本外交年表並主要文書』、〔Ⅲ〕はリード文4で構成されている。史料問題はAが3問、Bが2問の配分である。正文（誤文）を1つ選択する文選択問題は10題出題されている。

2月5日実施分〔Ⅰ〕はリード文5で構成されている。〔Ⅱ〕は史料文（A『徳川禁令考』、B『日本外交年表並主要文書』）、〔Ⅲ〕はリード文4つで構成されている。史料問題はA、Bそれぞれの史料につき3問ずつの配分である。正文（誤文）を1つ選択する文選択問題は10題出題されている。

以上、2026年度入試の各日程をまとめると、いずれも教科書や副教材の史料集に準拠した出題内容で、受験生には取り組みやすいと思われる。

史料文は各日程の〔Ⅱ〕で出題される。受験生には未見の史料文が出題されることもあるが、史料文中や設問文に必ずヒントとなる語句や説明があるので、これらを見逃さなければ正解できる。

学習アドバイス

●教科書の通読

問題のほとんどが高校教科書の記述のうち太字で書かれた基本事項を中心に出题されており、受験生にとっては見慣れない語句が含まれる設問であっても、リード文や他の選択肢を比較することで正解にたどり着くことができるため、難問はないとみてよい。時代・分野にかたよりはなく、まんべんなく出題されているので、まず教科書の本文を中心に歴史の流れを理解するように心がけよう。戦後史に関しては2026年度入試では2010年代まで出題されていることから、教科書的全範囲の学習を終えておく必要がある。ただし教科書本文だけでなく、教科書に掲載されている写真・図・グラフ・史料にも注意が必要である。特に2月5日実施分では鎌倉幕府成立の指標に関する出題があり、単なる語句の暗記だけでなく与えられた素材から判断して正解を出すなど、思考力を求める出題がみられた。次年度においても類似の出題が予想される。解答方式はマークシート方式であるが、重要語句は自分で書いて覚えるようにしよう。また音読も記憶の定着に効果的である。

●史料・地図問題への対策

全ての日程で史料問題が出題されており、教科書に掲載されている史料は、ヒント無しで史料の空欄補充が求められる場合もある。高得点をのぞむのであれば、頻出史料の熟読が必要となる。また史料の内容に関する出題もあるので、教科書に掲載されている史料の他に、山川出版社の『詳説日本史史料集』なども併用して、「どのような内容が書かれているか」という点にも注意しながら学習を進めていこう。地図問題は地方で起きた事件や各地の文化財などについて、その地域が属する都道府県を特定する形で答えさせる場合が多い。教科書を見ると地図が掲載されているページも多く、それぞれの地図を教科書本文とともに注意深く見ておこう。また古代から近世にかけて旧国名や藩で出てくることが多いので、その都度、現在の都道府県名は何か、場所はどこなのかなど注意しておきたい。地図に関しては教科書の他、副教材の図説(図版)にも多く掲載されているので積極的に活用しよう。

●過去問にチャレンジ

基礎力を問う問題集を選び、基本語句を何度も確認し、その上で本学の過去問に目を通すということが最善の対策である。過去問を自分自身で解いてみることで、入試の傾向をつかむことが出来るし、また自分の学習到達度を確認することが出来る。過去問活用はお勧めである。

出題傾向と対策

世界史

<全体分析>

	一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：大問3～5題 小問総数40問 難易度：標準
大問の構成	一般入試前期日程（1月26日） 〔Ⅰ〕インドの独立運動に関するリード文をもとに、インドの古代史から現代史を中心に出题。近代後期の自然科学や発明、第二次世界大戦と戦後世界に関する設問もあり。 〔Ⅱ〕リード文なし。近世・近代の西洋史について出题。 〔Ⅲ〕情報伝達に関するリード文をもとに、インターネット、製紙法、宗教改革について出题。 〔Ⅳ〕リード文なし。古代ギリシア史やビザンツ帝国について出题。 〔Ⅴ〕リード文なし。古代から現代の中国史について出题。 小問総数40問のうち、4つの文の正誤判定問題が17問、2つの文の正誤組み合わせ問題が4問、年代整序問題が4問、人物とその事績の組み合わせ問題が2問、人名・国名などを問う単答問題が13問。 一般入試前期日程（1月27日） 〔Ⅰ〕帝国主義に関するリード文をもとに、様々な地域の近代史・現代史を中心に出题。フン人に関する設問もあり。 〔Ⅱ〕移民に関するリード文をもとに、ヨーロッパやアメリカの近代史・現代史について出题。 〔Ⅲ〕ヘブライ人（ユダヤ人）に関するリード文をもとに、古代から現代のパレスチナやユダヤ人について出题。 〔Ⅳ〕リード文なし。古代から現代の様々な地域について出题。 4つの文の正誤判定問題が11問、2つの文の正誤組み合わせ問題が3問、年代整序問題が6問、人物とその事績の組み合わせ問題が1問、人名・国名などを問う単答問題が19問。 一般入試前期日程（2月5日） 〔Ⅰ〕神聖ローマ帝国に関するリード文をもとに、古代から近代のヨーロッパやオスマン帝国について出题。フン人に関する設問もあり。 〔Ⅱ〕「近世の帝国」に関するリード文をもとに、古代から近世の様々な地域について出题。 〔Ⅲ〕リード文なし。アメリカの近代史・現代史とヨーロッパ連合（EU）について出题。 4つの文の正誤判定問題が11問、2つの文の正誤組み合わせ問題が7問、年代整序問題が5問、語句の組み合わせ問題が3問、人名・国名などを問う単答問題が14問。

出題傾向・内容分析

●出題形式

4つの文の正誤判定問題、2つの文の正誤組み合わせ問題、年代整序問題、人物とその事績や関連する語句の組み合わせ問題、人名・国名などを問う単答問題が出題された。地図、図版、史料を使用した問題は出題されていない。

●出題されている時代

すべての日程で先史時代に関する出題はなかったが、古代史から現代史まで幅広い知識が問われている。1月27日は近代史、2月5日は中世史からの出題がやや多かったが、大きな偏りはない。どの日程でも数問ずつ現代史から出題されているため、未学習な時代をつくらないことが大切である。

●出題されている地域

どの日程もヨーロッパ、アメリカ、西アジア、東アジア、南アジア、東南アジアと多様な地域から出題され、西洋史と東洋史が概ね半数ずつになるように構成されている。対策が手薄になりがちな朝鮮、日本、遊牧民などに関する出題もあるため、注意が必要である。

●出題されている分野

政治史からの出題が中心であるが、社会・経済史や文化史からの出題も見受けられる。文化史は教科書に太字で記されているような基本的な知識が問われているため、教科書や資料集にまとめられた表などに目を通し、着実に得点したい。

●難易度

一部にやや難しい問題が出題されているが、概ね標準的なレベルである。半数程の設問が正誤判定問題で構成されているが、ほとんどの選択肢は教科書の記述に準拠しており、あいまいな正誤性を問うような難問・奇問は出題されていない。

学習アドバイス

●しっかりと学習計画をたて、すべての時代・地域・分野の対策をしよう。

古代史から学習をはじめ、現代史の対策が不十分なまま入試当日を迎える受験生もいるが、古代から現代まで満遍なく出題されるため、未学習な時代があると得点を取りこぼすことになる。出題されている地域も多様であることをふまえ、東南アジア史や朝鮮史といった地域史についても丁寧に学習しておきたい。歴史総合は試験科目ではないため細かな日本国内の政治に関する知識は出題されていないが、明治維新や八幡製鉄所の設立といった世界史探究の教科書に記述されている範囲内の日本に関する知識は問われているため、注意が必要である。必ずすべての時代・地域・分野の知識を身につけ、苦手な範囲については繰り返し学習できるように、計画的に学習を進めよう。

世界史

●教科書を精読し、歴史的事象の理解を心がけよう。

ほとんどの問題は教科書の記述にそった標準的なレベルであるため、まずは教科書を精読しながら歴史の大きな流れを理解しよう。その際、内容理解を問う正誤判定問題が多く出題されていることをふまえ、歴史用語の表面的な暗記に陥らないように留意してほしい。単に事件名や条約名だけ覚えるのではなく、どのような原因で起こったのか、結果やその事件がおよぼした影響は何か、条約の締結時期はいつか、誰が関わり、どのような内容が取り決められたかなどを丁寧に確認しよう。わからないことがあれば、必ず用語集などを使って調べ、理解を深めてほしい。

●時間軸を意識した学習を徹底しよう。

すべての日程で4つまたは3つの出来事の年代整序問題が数問ずつ出題されており、中には異なる地域の同時代の出来事を時代順に並べ替えることを求めるような難度の高い問題も見受けられる。これに加えて、1806年に起こった出来事を選択する問題や12世紀のイタリアに存在した国を選択する問題など年号や時代に関する知識がないと解けない問題も出題されている。こういった問題を苦手とする受験生は多いが、頻出年号は整理して覚え、常に何世紀の出来事か、同時代に他の地域ではどのようなことが起こっているかなど意識して学習しよう。

●問題演習を行い、自分の知識をもとに思考して問題を解く力を養おう。

語句の知識を問う問題は標準的なレベルであるため、得点に差がつくのは正誤判定問題と年代整序問題だと考えられる。同じ形式の問題が多く掲載されている問題集や本学の過去問を解き、ぜひ問題を解く力を養ってほしい。特に正誤判定問題は、何となく正解と思うものを選択するのではなく、選択肢を丁寧に読み、誤っている部分をチェックし、正文に書き換えながら解いていこう。これを繰り返すことで、どのような部分の正誤性が問われやすいのかわかるようになり、それを意識して選択肢を読むことができるようになる。また、誤文の根拠がわからない時は、用語集で調べて知識を補足していこう。この繰り返しによって問題を解くために必要な知識が着実に増えるため、正答率が上がるはずである。

出題傾向と対策

政治・経済

<全体分析>

	一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	大問3題、解答（マーク）数50問 分量はやや多い。 難易度は、例年通り、教科書レベルの標準的な問題がほとんどであるが、各日程とも何問か細かな知識を要する問題が出題されていた。ただし、教科書の内容をマスターすれば、合格点に達することは可能である。
大問の構成	一般入試前期日程（1月26日） 〔Ⅰ〕平和主義と日本の安全保障（語句選択・短文選択問題） 〔Ⅱ〕経済のグローバル化（語句選択・短文選択・組み合わせ・計算問題） 〔Ⅲ〕産業革命と資本主義経済の成立（語句選択・短文選択問題） 一般入試前期日程（1月27日） 〔Ⅰ〕裁判所（語句選択・短文選択問題） 〔Ⅱ〕現代の企業（語句選択・短文選択問題） 〔Ⅲ〕社会保障制度と税制（語句選択・短文選択問題） 一般入試前期日程（2月5日） 〔Ⅰ〕民主主義の発展と国際政治の動向（語句選択・短文選択問題） 〔Ⅱ〕国際経済（語句選択・短文選択問題） 〔Ⅲ〕国際政治・国際政治（語句選択・短文選択問題）

出題傾向・内容分析

●出題傾向

大問3題、解答（マーク）数50問、試験時間60分は例年通りで変わっていない。解答方法も全問マークシート方式の四肢択一問題である。1月26日日程では語句選択問題がおよそ6割を占め、短文選択問題が約3割、他に組み合わせ問題や計算問題で構成されている。1月27日日程では語句選択問題が5割、短文選択問題が5割で構成されている。2月5日日程では語句選択問題が約6割、短文選択問題が4割、他に組み合わせ問題1問で構成されている。

●出題内容

各日程の出題内容は<全体分析>の通りである。2026年度入試は、1月26日、1月27日、2月5日の日程で、現代の政治、現代の経済、現代の国際社会の各分野から出題されている。各日程の出題分野のウェイトを見てみると、1月26日日程は上記3分野からそれぞれ3分の1ずつの出題であったが、1月27日日程は現代の政治と現代の経済中心、2月5日日程は現代の政治と現代の国際社会中心となっており、日程ごとに出题分野のウェイトに違いが見られた。

●出題の特徴

教科書の内容に準拠した標準的な問題が大半を占めているが、一部に難度の高い問題が出題されていた。具体的には、1月26日日程の「底辺への競争」（〔Ⅱ〕問1 解答番号[21]）、1月27日日程の「黒い霧事件」（〔Ⅰ〕問4 解答番号[4]）、「オリンパス粉飾決算事件」（〔Ⅱ〕問3 解答番号[23]）、「コーポレートガバナンス・コード」（〔Ⅱ〕問4 解答番号[24]）、「にせ牛缶事件」（〔Ⅱ〕問6 解答番号[29]）、2月5日日程の「ヤルタ会談におけるポーランド問題」（〔Ⅰ〕問11 解答番号[12]）、「TICAD」（〔Ⅲ〕問1 解答番号[39]）である。

ただし、仮にこれらの問題が解けなかったとしても、大半を占めている標準的な問題で正解を得ることができれば、十分に高得点が目指せる内容である。

学習アドバイス

●教科書の内容を徹底的に理解しよう

現代の政治・現代の経済・現代の国際社会の各分野から出題される可能性があるため、すべての分野を学習する必要がある。また、教科書に準拠した標準的な問題が大半を占めているので、教科書の内容のすべてをしっかりと理解するようにしよう。その際、教科書に太字で書かれている重要語句の暗記に終始することのないように注意してほしい。例えば、次の文の正誤の判断ができるだろうか。「2014年に集団的自衛権の行使を全面的に容認する閣議決定がおこなわれ、自衛権行使の要件が改められた」（1月26日日程の問題より一部抜粋）。この文の場合、「集団的自衛権」という用語をおぼえただけでは判別が不可能である（「全面的に」の部分が誤り。正しくは「限定的に」である）。したがって、重要語句だけに注目するのではなく、本文の内容にも目を向ける必要がある。なお、教科書の脚注の部分や図表に書かれている語句が出題されることもあるので、それらへの目配りも必要である。

●用語集や資料集を利用しよう

教科書で学習している際に意味の分からない用語が出てきたら、用語集で意味を調べるようにしよう。また、政治経済という科目は時事問題に一番敏感な科目なので、最新版の資料集や、『朝日キーワード』（朝日新聞出版）などの時事問題対策の本を用意しておくとうい。

●問題集や過去問を解こう

出題傾向で述べたように、本学の問題は全体の5、6割が語句選択問題、残りが短文選択問題などで構成されている。前者については一問一答式の問題集、後者については私立大学の入試問題が収録されている問題集を1、2冊利用すると良いだろう。また、直前期には実力を確認するために本学の過去問に取り組んでほしい。

出題傾向と対策

物 理

<全体分析>

	一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：やや少なめ 難易度：基本から標準
大問の構成	一般入試前期日程（1月26日・2月5日） 第1問 小問集合（設問数5） 第2問 力学（設問数5） 第3問 電磁気（設問数5） 第4問 波動・熱（設問数5）

出題傾向・内容分析

一般入試（前期）

●出題範囲

物理基礎・物理

●出題傾向

特定の単元に偏ることなく、全分野からバランスよく出題されている。2026年は原子分野からの出題もあり、「物理基礎」と「物理」の全範囲を網羅する学習が必要となる。すべてマークシート方式であるが、数式を選択する設問の他に、数値計算、図の選択、文章の正誤判断など問われ方は様々である。難易度については、教科書の例題や章末問題のようなレベルで、基本から標準と言える。問題文も比較的短く、設定が明確で問われている内容の意味がわかりやすい問題がほとんどである。さらに、試験時間に対して問題量はやや少ないので、落ち着いてじっくり取り組むことができる。したがって、本学の入試において必要なのは、煩雑な数式を素早く処理する能力ではなく、物理学の諸法則に対する正確な理解と、それを忠実に適用する基礎学力であると考えられる。

●出題内容

《前期1月26日》

* 物理基礎

【力学】力のつり合い、放物運動、運動方程式、力学的エネルギー保存の法則

【熱】比熱と潜熱

【波動】うなり

【電気】抵抗、抵抗率

* 物理

【力学】運動量保存の法則、弾性衝突

【波動】光の干渉、ニュートンリング

【電気と磁気】磁場中を運動する導体棒、電流が磁場から受ける力

《前期2月5日》

* 物理基礎

【力学】等加速度運動、仕事、力学的エネルギー保存の法則

【波動】縦波

【電気】箔検電器

* 物理

【力学】非等速円運動、単振動

【熱と気体】定積変化、定圧変化、熱サイクル、熱効率

【電気と磁気】直流回路、抵抗値の測定、起電力の測定

【原子】半減期

学習アドバイス

物理では、自然界で起こる様々な現象を数式を用いて記述し、論理的に現象を解明する。入試対策においては、このような科目の特性を十分に理解した上で学習に取り組むことが不可欠である。つまり、物理の学習とは公式を丸暗記することではなく、現象を数理的に捉える思考回路を自分の中に構築する作業であるということを意識して問題に取り組むべきである。ここで「丸暗記」とは意味もわからずにただ単に文字の羅列を記憶することを指しており、これは物理の学習とは言えない。公式を覚える際には、必ず理屈を納得した上で覚えるようにしなければならない。

物理の問題を解く場合、まず問題文に記述された物理的状況を整理し、次にその状況に対してどの物理法則（運動方程式、保存則、キルヒホッフの法則など）を適用すべきかを考察し、そして数式で表現するというプロセスを経る。この現象から数式への変換こそが物理の学習の要であり、本学の入試においてもこのプロセスの正確性が可否を分ける決定的な要因となる。

具体的な学習法としては、問題集や過去問に取り組む際に模範解答を写すだけでなく、「なぜこの解法でなければならないか」「他の解法で解くことはできないか」という批判的な視点をもつことが重要である。簡単に見える基本問題であっても、解答の背後にある物理的な思考過程を自力で再現できるようになるまで習熟することは意外と難しい。しかし、それこそが未知の応用問題に対応できる柔軟な思考力を鍛える

物 理

唯一の道である。

本学の入試問題では、ミスが連鎖しないように配慮されている部分も多いが、すべてではない。連鎖的な間違いが起こると大きな失点になるので注意が必要である。試験時間には比較的余裕があるという特性を鑑みると、無理をして速く解く必要はないので、それよりも正確さを心がける必要がある。日々の演習でも精度を優先して丁寧に取り組む方が、本番での安定した高得点につながるだろう。

さらに、出題範囲の広さに対する備えも忘れてはならない。原子分野を含む全範囲からのバランスの良い出題が定番となっており、特定の単元に特化した「山張り」的な学習では対策にならない。難問対策の必要性は低いが、全単元において標準レベルの問題に対応できる網羅性が求められる。自分が苦手な分野もしっかりと対策しておくべきである。どの単元から出題されても基礎的な解法を正確に引き出せるように地道に準備しておくことが、合格への近道である。物理の学習を通して得られる論理的な思考力や、複雑な現象を数理的に解析する力は、試験での点数を上げることに限らず、大学入学後の高度な専門教育において強力な武器となる。日々の積み重ねが将来につながると信じ、目の前の問題に向き合ってほしい。輝かしい結果を手にする日を心より期待している。

出題傾向と対策

化学

<全体分析>

	一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：適当 難易度：基礎から標準
大問の構成	一般入試前期日程（1月26日） 第1問 小問集合 第2問 熱化学、化学平衡（緩衝液、電離定数、溶解度積） 第3問 無機物質（16族元素、気体の製法と性質、アルカリ金属元素、13族元素） 第4問 有機化学（炭化水素の分類と構造、アルデヒド、分子式 C_7H_6O の芳香族化合物） 一般入試前期日程（2月5日） 第1問 小問集合 第2問 溶液（気体の溶解度、浸透圧、コロイド）、電気分解 第3問 無機物質（15族元素、鉄、銅、錯イオン） 第4問 有機化学（分子式 C_6H_{14} の炭化水素、分子式 C_4H_8O の脂肪族化合物、芳香族化合物の分離）

出題傾向・内容分析

一般入試（前期）

●出題範囲

化学基礎、化学

●出題傾向

各分野の基礎～標準的な内容を理解しているかを問う内容となっている。出題範囲は幅広いが、高分子化学からの出題は小問集合のうち1問となっている。第1問は化学基礎と化学の全範囲からの小問集合、第2問は理論化学、第3問は無機物質、第4問は有機化学からの出題となっている。

●出題内容

* 理論化学

溶液（気体の溶解度、浸透圧、コロイド）、電気分解、熱化学、化学平衡（緩衝液、電離定数、溶解度積）

【小問集合】電子配置、物質の三態、物質の質量、化学反応と物質の質量、酸化数、気体

* 無機物質

15族元素、16族元素、気体の製法と性質、アルカリ金属元素、13族元素、鉄、銅、錯イオン

【小問集合】無機物質の工業的製法、金属結合と合金、アルカリ金属元素

* 有機化学

炭化水素の分類と構造、分子式 C_6H_{14} の炭化水素、分子式 C_4H_8O の脂肪族化合物、アルデヒド、分子式 C_7H_6O の芳香族化合物、芳香族化合物の分離

【小問集合】油脂、糖、芳香族化合物の構造異性体

* 高分子化合物

大問としては扱われていません。

【小問集合】合成高分子化合物

学習アドバイス

教科書の特定の分野に偏った出題ではなく、幅広い範囲から出題されているが、すべて基礎的か標準的な難易度の問題である。したがって、教科書をよく読み、教科書の例題などを確実に身に付けることが大切である。また、教科書傍用問題集を利用して、しっかりした理解ができているかを確認する学習を行うとより良いだろう。苦手分野をなくすように学習していきたい。

どちらの日程も、第1問の小問集合7問のうち4問は理論化学の分野に関与する問題であり、理論化学分野の出題が一番多い。

理論化学の大問においては、7問の設問のうち4、5問は計算問題である。計算問題が苦手ならば、積極的に教科書傍用問題集の問題を解きたい。また、本年では熱化学において、ヘスの法則などの定義がしっかり理解できていないと正解を導き出せない正誤問題も出題されているので、定義や実験器具の取り扱いなども学習して欲しい。

無機物質の大問においては、非金属と金属のどちらも出題されているので、まんべんなく学習することが必要である。無機物質の分野は、知識が定着しにくい人が多いので、毎日10分のように短時間の学習を繰り返して、知識の定着を図るのが有効であろう。

有機化学は覚えることが多い分野であるが、関連性のある物質や反応が多くあるので、学習を続けていくと無機物質の分野より知識が定着しやすいであろう。どちらの入試日程の問題でも異性体に関する出題があるので、教科書傍用問題集などを用いて、代表的な分子式の異性体に関してはしっかりと身に付けておきたい。

高分子化合物の問題は、どちらの入試日程の問題でも第1問の小問集合に設問が1問出題されているだけなので、学習時間が確保できない場合は、教科書をよく読み、教科書の例題を解く程度で大丈夫であろう。

教科書や教科書傍用問題集を用いて学習し、知識や問題の解き方が身に付いたならば、総まとめとして過去問を解きたい。その際、間違えた問題があれば、その分野の教科書を丁寧に読み直して欲しい。このような学習を繰り返していけば、合格を手にするのはそれほど難しくはないであろう。

出題傾向と対策

生 物

<全体分析>

	一般入試
試験時間	60分
解答形式	すべて客観式（マークシート方式）
分量・難易度	分量：適量 難易度：基礎～標準
大問の構成	一般入試前期日程（1月26日） 第1問 小問集合（文章選択・グラフ選択など） 第2問 A 進化のメカニズム（空欄補充・文章選択など） B 人類の進化（空欄補充・文章選択など） 第3問 A 遺伝情報の複製と分配（空欄補充・計算など） B 遺伝情報の発現（空欄補充・文章選択・計算など） 第4問 A 植物の生殖と発生（空欄補充・文章選択など） B 花芽形成の環境応答（空欄補充など） 一般入試前期日程（2月5日） 第1問 小問集合（空欄補充・文章選択・計算など） 第2問 A 生物の進化（空欄補充・文章選択など） B 人類の進化（空欄補充・文章選択・計算など） 第3問 A 植物の環境応答（空欄補充・文章選択など） B 遷移・花芽形成の環境応答（空欄補充・文章選択など） 第4問 A 刺激の受容（空欄補充・文章選択など） B 効果器（空欄補充・文章選択など）

出題傾向・内容分析

●出題範囲

生物基礎・生物

●出題傾向

生物基礎・生物の全範囲よりバランスよく出題されている。出題形式も、空欄補充や文章選択・計算など多岐にわたっている。また、動物に関する内容と、植物に関する内容のどちらにも偏ることなく出題されている。

●出題内容

どちらの日程でも第1問の小問集合は、主に生物基礎の内容に関する小問から構成されている。1つの大問で、生物基礎の主要3分野「生物の特徴」「ヒトの体内環境の維持」「生物の多様性と生態系」の全てから満遍なく出題されている。

第2問はどちらの日程でも進化に関する出題となった。特に、第2問のBは共に人類の進化に関する出題であり、内容に類似性も見られた。問われた内容は、人類の誕生した年代などを正確に覚えていないと正解できない問題もあり、やや細かい知識が要求された。また、2月5日の第2問では、分子系統樹に関する計算が出題されており、系統樹の形も自分でイメージする必要のある問題であった。

1月26日の第3問は、細胞分裂の過程や細胞周期に関する計算、転写・翻訳の流れに関する出題であった。ポリペプチドの分子量を求める問題では、ペプチド結合形成時に水分子が抜けることを考慮して計算する必要がある問題となっていた。続く第4問では、重複受精の過程や胚乳の遺伝子型、花芽形成のしくみや、ABCモデルに関する内容と幅広く出題された。特に胚乳の遺伝子型は、多くの受験生が苦手とする内容であり、注意が必要である。

2月5日の第3問はオーキシンの極性移動、光受容体、屈性と傾性、花芽形成に関する内容が出題されている。続く第4問では、耳が音を受容するまでの流れや、筋収縮のしくみ、屈筋反射の反射弓に関する内容が出題された。基本的な内容が中心であるものの、運動ニューロンの末端から放出される神経伝達物質の種類なども問われ、幅広く出題されている。

出題形式は空欄補充が最も多い。教科書を超える知識は出題されておらず、標準的な知識が多く、発展的な用語は出題されていない。文章選択の問題でも、簡潔な文章正誤問題で取り組みやすい内容がほとんどであるが、一部の問題では3つの文章全ての正誤を正しく判断しないと正解できない問題も含まれており、注意が必要である。また、各日程で計算問題が出題されている。そのどれもが生物の入試では定番と言われる問題なので、難易度としては標準レベルである。しかし、計算問題は苦手意識をもつ受験生が多いので、合否を分けるポイントになるだろう。

生 物

学習アドバイス

本学の入学試験問題は、基礎～標準の知識問題を中心とした構成となっている。難問・奇問の類は出題されないので、生物の勉強量がそのまま得点につながる試験であると言える。したがって、求められているのは

- ① 基礎から標準の知識を習得しているか。
 - ② 各種生命現象を、用語の暗記だけでなく正しくつながりのある現象として理解しているか。
- ということである。

このような試験において、高得点を取るために最重要なのが教科書をマスターすることである。受験生の中には、生物の勉強でわからない部分が出た際に、教科書傍用問題集に付随する簡単なまとめのページで知識の確認を済ませてしまう人がいるが、それは避けた方がよい。大学入試問題というのは、教科書をベースに出題されるものであり、特に本学においては、教科書に準じた出題となっている。教科書の徹底的な理解が高得点への最短距離だと考えて欲しい。教科書というのは、初見ではわかりにくいと感じるかもしれないが、ある程度学習してから精読すると、色々な情報が載っていることに気づくはずである。そして、読み込む度に新しい発見があると思うので、是非、何度も読み込んでもらいたい。ただし、わからない部分の確認だけだと、どうしても分野に偏りが生じてしまう。本学の出題分野を見てもらえればわかる通り、教科書から幅広く出題されている。したがって、苦手分野をつくらないことも重要な対策となる。例えば、生物基礎のバイオーム分野などは、学校で扱って以降、自ら学習することを後回しにしている受験生が多いのではないだろうか。自分の学習を振り返って、抜けている分野がないか確認するとよいだろう。

そして、ある程度知識を入れることができたなら、次に覚えた単語を現象としてつなげていく必要がある。知識を点で終わらせることなく、点と点をつなげていく作業を意識してほしい。例えば、1月26日の入試でも、被子植物の胚発生において、胚球と胚柄がそれぞれどうなるかが問われている。ただ、単語を覚えているだけであった受験生にはかなり難しく感じられる。また、教科書に載っているような図に関する問題も出題されているので、文章だけでなく、図にも注目することも念頭に置いておくとうい。なお、忘れてはならないのが問題演習である。演習を繰り返すことで、自分の知識の足りていない部分を明らかにすることができる。その間違えた部分をしっかりと覚え直していけば、効率的に自分の足りていない部分を伸ばすことが可能になる。

全体的に、それほど難しい問題が出題されるわけではないので、ミスをしなないことが重要になってくる。普段の学習で間違えた問題の直しをしっかりと行い、正しい知識を定着させていくことが大切である。そういった地道な努力がしっかりと得点に反映されやすい試験問題になっているので、是非頑張ってもらいたい。